

## 2022年7月31日聖霊降臨後第8主日説教（特定13）

コヘレトの言葉 第1章12～14節 第2章18～23節

コロサイの信徒へ手紙 第3章5～17節

ルカによる福音書 第12章13～21節

日本が新型コロナウイルス陽性反応者世界最多などの報道があり、身近な方々でも陽性反応となった報告も聞こえてきます。主教教書（27）が発行され、感染対策の徹底と各教会の状況に応じた礼拝への対応が述べられています。わたしたちの東京聖三一教会は、従来とおりの感染対策を実施しつつ、礼拝を継続します。コロナ禍のほか熱中症の危険などもありますので、皆さまどうぞ体調にお気を付けください。

さて、本日の旧約日課は、「コヘレトの言葉」です。この文書は、かつて「伝道の書」と呼ばれていました。そう訳されていたのは、「コヘレト」という言葉に、「伝道者」という意味もあるからです。「新共同訳」から原語のままの表記となり、新しい「聖書協会共同訳」でも同じです。

伝統的には著者は、ダビデ王の子、ソロモン王だとされますが、実際には、紀元前3世紀頃の文書と考えられます。その意味では『聖書（旧約）』の中で新しい文書の一つです。

「コヘレトの言葉」は、「コヘレトは言う。なんという空しさ、すべては空しい」（1章2節）で始まっています。今朝の個所も「これまた、実に空しいことだ」で終わっています。「空しい」を強調するところが、この文書の特徴です。

現在の「新共同訳」で「空しい」と訳されている言葉ですが、かつての口語訳では、「伝道者は言う、空の空、空の空、いっさいは空である」（口語コヘレト1:2）、また「これもまた空である」と訳されていました。このほうが直訳に近く、またこの「コヘレトの言葉」のなんとも言えない不思議さを示していました。また、わたしたち日本人には、「空しい」よりも「空」と表現したほうが、宗教的あるいは哲学的な名言として、おさまりがよいように思えます。「新共同訳」が「空しい」と訳した理由を、はっきりと聞いたわけではありませんが、「空しい・空」と訳された言葉は、もともと「蒸気」や「息」を意味し、「空」という言葉から感じられる日本語のニュアンスとは、少し異なると考えられたのかもしれませんが、しかし、「蒸気」や「息」だから日本語では「空」なのだという主張も正しいのです。

それらの理由からでしょうか、新しい「聖書協会共同訳」では、「コヘレトは言う。空の空、空の空、一切は空である」（協会共同コヘレト1:2）と前の口語訳に近い訳になっています。『聖書』の内容を分かりやすく伝えるために翻訳することと、『聖書』の言葉にある深み・重みを伝えるために翻訳することの両立が、難しいことを示す一例といえます。

「空しい・空」に代表される「コヘレトの言葉」ですが、その世界観、人生観は、他の『聖書（旧約）』の個所と異なっています。それは本日の日課では「わたしは太陽の下に起こることをすべて見極めたが、見よ、どれもみな空しく、風を追うようなことであった」（コヘレト 1：14）という箇所にも顕著です。ここは、豊かさや様々な人間的な努力で達成できる事柄を、すべて経験しても、あえて「実に空しい」と述べています。この主張は、『聖書（旧約）』の中でも独特です。なぜならば、『聖書（旧約）』では、主なる神様は天地創造の初めに、人間を含めすべてを「よし」とされ、人間が自らの意思で主なる神様に立ち返って従って歩むならば、この世界で恵みが与えられ、幸せに暮らすことができる、そのような単純な因果応報構造の世界観、人生観があるからです。しかし、人間は、自由意志でその主なる神様の意思に背いてしまっており、主なる神様に立ち返るならば、この世界で恵みに満ちた生活になるはずなのです。しかし、「コヘレトの言葉」の主張は、そのような主張とは異なっているのです。どれも「空しい」からです。

このような「コヘレトの言葉」の主張は、主なる神様を信じたとしても、また信じなかったとしても、空しいのであるならば、主なる神様を信じることも自体も空しいのではないか、そんな問いを起こさせるのではと思えますし、そうではありあせん。主なる神様を信じることは、大前提であるからです。「コヘレトの言葉」は、今の豊と幸福と信仰とを安易に結びつけるような因果応報の価値観も、現実的な出来事に何か反映しないような信仰に対する批判も超えて、あらためて、主なる神様に従うこと、大前提に戻することを求めているのです。そこには、主なる神様がすべてについて決定されており、その決定は、人間のすべてを超えて、主なる神様の視点でよいものであるはずだという信頼があるのです。

「コヘレトの言葉」は、『聖書（旧約）』の中でも新しい（最後）の方の一つと申しましたが、それは「創世記」から『聖書（旧約）』を読み、律法も学び、「ヨブ記」も学び、「詩編」も学んだ、そして歴史の流れの中で現実も見た、そして様々な事例を認識したうえで、それでも主なる神様を信じるのみという、一種悟りの境地のような事柄を伝えていると思います。

「コヘレトの言葉」の最後は、「すべてに耳を傾けて得た結論。『神を畏れ、その戒めを守れ。』これこそ、人間のすべて。神は、善をも悪をも一切の業を、隠れたこともすべて裁きの座に引き出されるであろう。」（コヘレト 12：13-14）という言葉で終わっています。ここにあるのは、従来と同じような主なる神様への信仰と律法への尊重の勧めと同時に、最後の審判にもつながるような内容です。「コヘレトの言葉」は、『聖書（旧約）』の中で新しい文書に属すると申しましたが、まさに『聖書（新約）』にあるイエス様の教えとつながる部分があるのです。

さて、本日の福音書の物語は、群集のひとりが遺産相続についてイエスに質問したことから始まります。「コヘレトの言葉」の学びからすると、一気

に現実に引き戻されたような感じですが。ただし、主題は主なる神様と富との関係についてです。

「**群衆の一人が言った。『先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。』**」(ルカ 12:13)、群衆の一人が、イエス様にこのように願い出たのは、イエス様が律法について詳しいと考えたからでしょう。律法は、ユダヤ人にとって単に宗教的な法ではなく、日常生活いっさいについて判断を与える法律でもあるからです。どちらかというとな宗教以外の項目のほうが多く、いわゆる法律に他らないのです。だからこそ、弁護士に相談するのと同じように、イエス様に相談したのでしょう。それに対して、イエス様の答えは、「**イエスはその人に言われた。『だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。』**」と少しそっけないものでした(ルカ 12:14)。

イエス様の教えの中では、主なる神様と富との関係は明白です。その両者に仕えることはできないということです。その意味では、イエス様に相談する必要はないのです。本日の個所でも最後に、「**自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。**」(12:21)とあります。また、少し進んで16章13節では、「**どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない**」とあります。イエス様にとって、富みについて悩み執着することは、主なる神様から離れてしまうことに他ならないのです。そして、コヘレトの言葉を借りれば、「空しい」ことにほかならないのです。

ただし、イエス様のこの富に関する教えを解釈するときには注意が必要です。「富」に関する状況や価値観が、イエス様が最初に語られた時代状況、それを掲載した「ルカによる福音書」が書かれた時代と最初に読まれたであろう教会の時代状況、それらが異なるからです。また、それぞれ状況の中でも、違いがあるからです。さらには、それら全体が、現代の状況とは異なっており、現代の状況と言っても様々であるからです。その意味では、わたしたちは、わたしたちの現代の状況で(それも様々ですが)、「ルカによる福音書」に書かれているイエス様の言葉を解釈する必要があります。

わたしたちの現在の時代状況では、平均的な状況で生まれた人にとっては、真面目に働いていれば、病気や事故や大失敗などいわゆる不幸に出会わない限り、そのままある程度は平均的な経済状態で過ごすことができると思います。一般的には、主なる神様か富かという二者択一的選択をしなくても、両立させたまま無理なく生活できるといえるのです。現在の日本は、もうそのような状態ではないという見方もあり、その点に関する分析・対応も大切です。また、わたしたちの教会の周りには、それよりも恵まれた状態の人も多いと思います。主なる神様などまったく無関係でも問題ないかもしれません。

しかし、イエス様の時代は、決してそうではありませんでした。ローマ帝国内では、法律はありますが、様々な格差が当然のように存在しました。律法が社会を律するはずのイスラエル・ユダヤにおいても、「コヘレトの言葉」にも「奴隷」という言葉が出てくる通り、格差は存在しました。そして低い立場に置かれた人たちは、どんなにまじめに働いたとしても、決して豊かにはならない社会でした。そもそも平均という概念がなく、貧しいか豊かかの二者択一であり、ほとんどの人が貧しい状態を選ばざるを得なかった時代でした。イエス様も、そのような状況の中の一人であったと思います。逆に、「富」を持っている人は、現代の状況とは異なり、法律はあってもいつそれを奪われるかわからないという時代でした。イエス様に相談した人は、「遺産」がある分、イエス様よりもはるかに豊かであり、そのような人であったのかもしれませんが。そのように考えますと、イエス様の言葉よりも、「コヘレトの言葉」の方が、現代の状況のわたしたちには何かを伝えることが多いかもしれません。

しかし、「コヘレトの言葉」、イエス様の教え、それらを今読んでいる現代のわたしたち、それらすべての状況において、共通点があります。どんなに豊かであっても（反対からいえば貧しくても）、人間は死を超えることはないということです。そこに本質的な「空しさ」があります。だからこそ、人間が求めるべき事柄とは、この世界にいのちを与えてくださった、主なる神様を信頼すること以外にない、という結論に達することができるのです。「コヘレトの言葉」もイエス様も、そのことを語っているのです。

ただし、イエス様の場合は、悲しみや苦しみの中にある人びとと同じ地平に立ち、そこにおいても人間が求める事柄は、主なる神様を信頼すること以外にないと言っています。さらにイエス様の場合は、十字架の死と復活を通して、死をも超えた永遠の命、本当の命に至る道を示しています。

今日も、「コヘレトの言葉」やイエス様が目の当たりにしたのと同じような悲しみや苦しみがあります。しかし、そうであるからこそ、主なる神様によって集められたわたしたちは、主なる神様を信頼することに本当の喜びがあると、示していかなければならないのです。ニュースで知る世界で起きている出来事に、わたしたちの住む周囲の出来事に、あるいは自分自身の出来事に、「空しさ」を感じたとしても、その「空しさ」の先には、この世界を超えた主なる神様が下さる恵がある、いのちがある、そのように信じて歩むことが大切なのです。本日の使徒書に「そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。」（コロサイ 3：17）とあります。すべてに関して、すべてを通して導いてくださる、主なる神様への感謝を、イエス様と通しておこない続けたいと思います。わたしたちがそのように歩むとき、この世界の悲しみを少しでも減らしていく歩みも生まれてくると思います。